

効果的な活動を実践するためのヒント

～“開発効果”の議論から振り返る、日本のNGOの活動

より効果的な開発の担い手となるために ～世界のNGOが議論してきたこと～

2012年9月4日(火)

JANIC 調査・提言グループ マネージャー

水澤 恵



地球 × 未来、あなたと今できること。

NGOを支援するNGO
国際協力NGOセンター(JANIC)


Japan NGO Center for International Cooperation

発表の内容

1. 開発効果の議論の背景と流れ

2. CSOの開発効果イスタンブール原則とは？

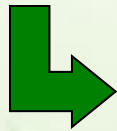
1-1 CSO開発効果の議論がでてきた背景

- ミレニアム開発目標(MDGs)を達成するためには、援助の質(援助効果・開発効果)をあげることが重要。
 - 2005年の第2回援助効果向上閣僚級会議で、ODAの援助効果を向上させるための「パリ宣言」が合意。
- 
- ODAの質向上を求めるだけでなく、自分たちの存在・活動を振り返る/見直す必要があるのでは？
 - 自分たちは何者なのかを対外的に示す意味でも、CSOが重視する価値観や指針を示すものが必要なのでは？
 - 国際的なネットワーク(Open Forum for CSO Development Effectiveness)が中心となり、2012年の第4回援助効果向上閣僚級会議までに、文書を取りまとめることに。

1-2 CSOが考える開発効果とは？

パリ宣言／援助効果に対する批判

技術的・管理的な内容に特化しすぎている
＝限定的な効率化の議論

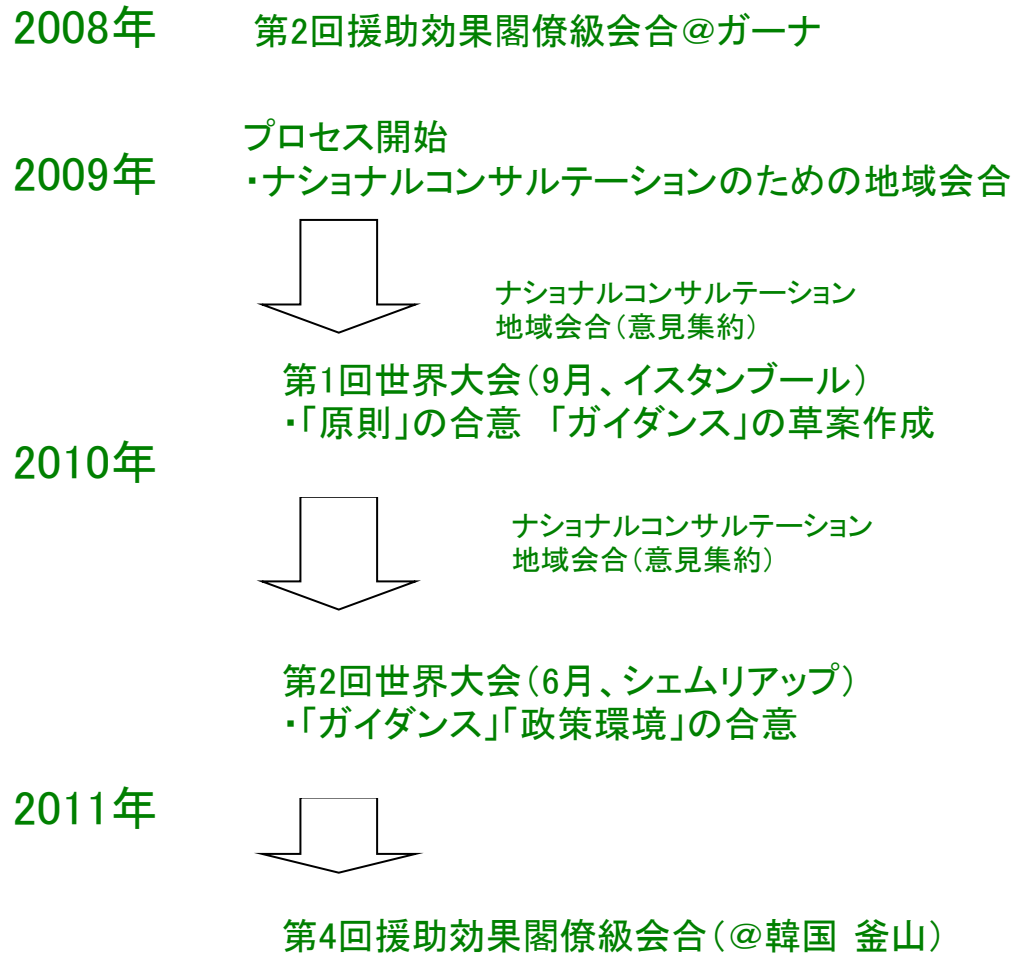


CSOにとっては援助効果より”開発効果”が重要

CSOが考える”開発効果”とは

- 貧困、不平等、社会から阻害されている状態の原因や状況を認識した上で、民主的な環境の中で起こる持続的な変化。
- 貧困層や、脆弱層等社会から取り残された人々を巻き込んだ多角的で人間的かつ社会的な開発プロセス。

1-3 CSO開発効果の議論のとりまとめのプロセス



<日本での動き>

2011年2~3月

- ・第1回ナショナルコンサルテーション
- ・マルチステークホルダー対話

2011年9月

- ・第2回ナショナルコンサルテーション

2012年1月

- ・第3回ナショナルコンサルテーション

2-1 CSO開発効果イスタンブール原則とは？

イスタンブール原則

CSOの社会経済的、政治的、組織的関係を規定する価値や特質を8つの原則(指針)にまとめたもの。

= CSOが活動する際の基準点

とりわけ、社会的弱者の権利を重視するもの

国際枠組み(シムリアップ合意)

イスタンブール原則をより詳細に説明し、CSOの活動に落とし込むための「ガイダンス」をまとめたもの。

2-2 CSO開発効果イスタンブール原則の意義

[ボトムアップで合意された原則]

- ドナー・途上国に関わらず、約100か国のCSOが各国で議論を行い、それを土台に合意された内容であること
- 国際社会が決めたトップダウンのルールではない！

[政府も賛同した内容]

- 第4回援助効果向上閣僚級会合の成果文書にも言及された
- 政府や国際機関と対話にも活用が可能
- 米国、EU/EC、韓国、カンボジア、日本政府は、独自に「賛同」を表明。
- 特に、多くの途上国にとってはCSOが活動しやすい政策環境づくりを求めていく上で武器になる！

2-3 CSO開発効果の8つの原則/指針

1	人権と社会的正義を尊重し、推進する
2	女性と少女の人権を推進し、ジェンダーの平等と公平性を実現する
3	人々のエンパワメント、民主的オーナーシップと参加に焦点を当てる
4	環境の持続性を推進する

5	透明性とアカウンタビリティを遵守する
6	公平なパートナーシップと団結を模索する
7	知識を創出、共有し、相互学習に関与する
8	プラスの持続的変化の実現に寄与する

原則 1 & 原則 2

原則 1

人権と社会的正義を尊重し、推進する

- ・CSO戦略、活動、実践において個人、集団の人権を盛り込む
- ・政府の人権への説明責任も要求
- ・権利ベースアプローチの推進
- ・国際人権基準、その他の権利条約に対応

原則 2

女性と少女の人権を推進し、ジェンダーの平等と公平性を実現する

- ・エンパワーされたアクターとして開発プロセスへ参加→個人、集団としての権利の獲得
- ・機会、資源、意思決定への平等なアクセス
- ・差別的な法律、政策、実践を是正
- ・女性組織、女性運動が原動力

原則 3 & 原則 4

原則 3

人々のエンパワメント、民主的オーナーシップと参加に焦点を当てる

- ・人々の影響力の向上、自身の生活に影響を及ぼす要因(政策、開発事業)をコントロール
- ・市民としての権利、公共政策への参加
- ・市民社会の自立性、多様性の確保
- ・ローカルCSOの主体性

原則 4

環境の持続性を推進する

- ・生態系保全と正義を確保
- ・気候変動の危機への対応
- ・現地の社会経済、文化、先住民や土地固有の生活方式に配慮
- ・生態系の持続性を確保するための技術、能力の構築と環境正義の適用

原則 5 & 原則 6

原則 5

透明性とアカウンタビリティを遵守する

- ・内部運営における透明性、公開性、民主的な実践
→CSOの社会正義と公平性を強化
- ・多方向アカウンタビリティ（ダウンワード、ホリゾンタル、アップワード）
- ・透明性、説明責任を果たす技術、能力が十分でないCSOへの支援の必要性

原則 6

公平なパートナーシップと団結を模索する

- ・相互の尊重と信頼、組織の自立、透明性のある関係
- ・共通のゴールやプログラム目的を共有し長期的にコミットする
- ・不公平、不平等に対する力のバランスを是正
- ・CSO同士（国内外）、CSOと住民、CSOと政党、選挙民などとの関係

原則 7 & 原則 8

原則 7

知識を創出、共有し、相互学習に関与する

- ・地域、先住民の知識、文化、ジェンダー関係などを反映した開発実践の成果のまとめ
- ・他の開発アクターから学ぶ
- ・CSOの戦略、優先事項、作業方法への適用性や向上に不可欠
- ・結果重視だけでない学習（関係やプロセスを含む）

原則 8

プラスの持続的変化の実現に寄与する

- ・貧困者、社会から疎外された人たちの生活の持続的な変化に焦点をあてる
- ・社会変容の実現として、CSOとして発展の可能性、組織的な持続性が不可欠
- ・CSOの基本的な貢献、ギャップを埋める役割
- ・政府の肩代わりではない

2-4 今日の目的と今後の予定

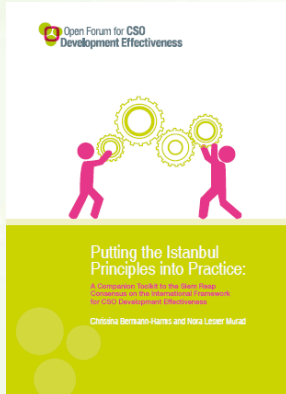
今日の目的

CSO開発効果の議論から、日本のNGOの活動の質をいかに向上させていくかを議論し、皆さんの活動に役立てていただく

JANICの今後の活動

イスタンブール原則を土台に、
「効果的な活動を実践するための手引き」を作成する

2-5 もっと詳しく知りたい方へ



実践ツールキット 「原則」の取り組み方を詳述



アドボカシーツールキット 「政策環境」の実現方法を記載

ツールキットの目的

「イスタンブール原則」と「シエムリアップ合意（国際枠組み）」を活動に落とし込むサポートをすること

ツールキット活用例

- ・団体内の隠れたバイアスや非生産的な思考を批判的に考察するとき
- ・現在の戦略を見直すとき
- ・新たな目標を設定するとき
- ・事業を評価するとき
- ・計画、実施、モニタリングなどにおける新しいアイデア、情報を得たいとき